

イチゴのチビクロバネキノコバエ幼虫に有効な薬剤

本県のイチゴ栽培では、チビクロバネキノコバエ (*Bradysia difformis* Frey) による被害が確認されています。本虫が多発生すると、幼虫がクラウン内部へ食入したり、花を加害したりするため、新芽の伸長停滞や奇形果が生じ減収につながります。

イチゴでは、使用可能な農薬は限られており、有効な防除技術は確立されていません。そのため、チビクロバネキノコバエ幼虫に有効な薬剤を明らかにしました。

【研究のポイント】



イチゴの生育不良苗



イチゴ花への食害

<成果のポイント>

①イチゴの育苗圃においては、ランネート45DF及びカルホス乳剤の灌注処理が、チビクロバネキノコバエ幼虫に対して高い効果があります。

②本圃においては、定植時におけるアクタラ粒剤5の処理と、生育期におけるモスピラン粒剤の株元散布が有効と考えられます。

※ミツバチに対しては、モスピラン粒剤の影響は少ないですが、アクタラ粒剤5は30日間影響があるとされていますので、薬剤の使用に注意する必要があります。

【研究の成果】



クロバネキノコバエ類成虫



クロバネキノコバエ類幼虫

【生産者の声】

育苗時期の防除により、キノコバエの加害が減りました。ハウスでの粘着シートの利用も効果がありました。これからも育苗時期を主体としたキノコバエ対策をしていきます。(JAおおいた くにさき いちご部会 清末正臣氏)



【連絡先】

担当：農林水産研究指導センター 農業研究部 病害虫チーム
TEL : 0974-28-2078
住所：大分県豊後大野市三重町赤嶺2328-8